

## 2018年「ガラス産業連合会新年会」報告

(一社) ニューガラスフォーラム事務局

### Report on the New Year Party 2018 of the Glass Industry Conference



左から、板硝子協会、硝子繊維協会、電気硝子工業会、日本硝子製品工業会、日本ガラスびん協会、ニューガラスフォーラムの各会長

東京では前日午後から4年ぶりとなる大雪に見舞われ、その雪がまだ残る厳しい寒さの中、2018年1月23日(火)に、恒例の「ガラス産業連合会(GIC)新年会」が、東京都千代田区の如水会館にて開催されました。ガラス産業連合会は2000年3月に設立され、この新年会は翌々年の2002年から続いており、今年で第17回目となりました。今回も経済産業省、学界、会員企業、関連団体、報道機関等総勢344名の参加を得、昨年と同様の盛況な新年会となりました。

この新年会は、ガラス産業連合会に加盟する板硝子協会、硝子繊維協会、一般社団法人日本硝子製品工業会、日本ガラスびん協会、電気硝

子工業会、一般社団法人ニューガラスフォーラムの6団体で主催しており、今年は板硝子協会の森谷茂明専務理事の司会により行われました。

加盟6団体の、島村琢哉板硝子協会会長(旭硝子株式会社代表取締役社長執行役員CEO)、フランシス・ショレー硝子繊維協会会長(マグ・イゾベール株式会社代表取締役社長)、小林善則電気硝子工業会会長(旭硝子株式会社常務執行役員電子カンパニープレジデント)、岡本毅日本硝子製品工業会会長(岡本硝子株式会社代表取締役社長)、齋藤信雄日本ガラスびん協会会長(東洋ガラス株式会社代表取締役社長)、そして、有岡雅行ニューガラスフォーラム会長(日本電気硝子株式会社代表取締役会長)の各会長紹介

に続き、ガラス産業連合会の島村会長から挨拶がありました。その要旨は次の通りでした。



直近の経済状況を見れば、イギリスのEU離脱（ブレクジットショック）、アメリカ、フランス、ドイツ等の政治トップの交替選挙が続き、また、ポピュリズムの台頭による政治的不安要素もあって、良くなってきた経済状況に水をさすような状況があり、結果として日本経済も影響を受けるのでは、と心配されたが、2017年は総じて順調な成長ができた年であったかと考えられる。IMF 経済見通しの成長率でも、全世界で言えば、2018年は3.9%で昨年10月発表より0.2ポイント上昇し、日本の場合でも、昨年10月時点の見通し0.7%から1.2%に伸びており、これは明るいニュースといえる。一方、我々の社会では、情報通信技術、いわゆるICT、IOTの進化の速度がめざましい。また最近では、AIを用いた“Society 5.0”に向けた大きな産業変化がおきてくる。そんな状況に我々は位置している。これらのイノベーションにより産業全体が変わっていくとき、過去の歴史を見ても、それを支えたのは素材であった。これから大きな変化がおきるが、ガラス産業界の関係する製品が大きなイノベーションを引き起こす支えになる可能性を感じる。一方、スマート社会実現のもとに、SDGs (Sustainable Development Goals) という国連で採択されたコミットメントと貢献は、企業として求めざるを得ない重要な課題である。

ガラス産業連合会は従来から3つの主要な活

動をしてきた。すなわち、(1) 産業全体に関わる技術開発、(2) 政策の提言、(3) 環境・省エネ問題の対応、である。環境対策については、低炭素社会の実行計画のフォローアップを継続していくとともに、産学官交流の拡充という意味でガラス技術シンポジウムを開催していく。また技術開発については、次世代の廃棄物ガラス固化処理技術への協力も行っている。これらを通じて、新たな成長の機会を見いだしたい。最後に、今年9月にガラス国際会議（ICG 2018）が開催されるが、日本のガラス業界が持つ発信力、技術力を世界に伝える良い機会ととらえ、一人でも多くの方が参加するようお願いしたい。

次に、ご来賓代表として、及川洋経済産業省製造産業局大臣官房審議官からご祝辞があり、その要旨は次の通りでした。



世界情勢を見れば不安定な要素や懸念材料はあるが、国内を見れば、5年間のアベノミクス、その間の様々な政策や金融再生政策により、経済の好循環は着実に実現している。具体的には、この5年間で名目のGDPは56兆円増加、企業の経常利益も過去最高の水準に達している。雇用で見れば、就業者数も4年連続で増加し、正社員の有効求人倍率も1を超える状況である。政府では、良好な企業業績を賃上げや設備投資につなげていくことが重要と考えている。そのためには、先進国の共通の課題である生産性の伸び悩みへの対応が重要である。昨年、「生産性革命」と銘打った政策パッケージを出し、2020

年までの3年間を集中投資期間としてイノベーションを引き起こし、法人税を含む大胆な税制、予算規制改革等を実現しようとしている。具体的には、経済産業省が昨年来、力を注いでいる“Connected Industries”を大きな鍵と考えている。ガラス業界も“Connected Industries”の担い手と考え、皆様の活躍を期待している。ガラス業界については、少子高齢化、人口減少を背景に、板ガラス分野は厳しいと聴いているが、一方で自動車産業は、EV化、コネクテッド化等に対応した高機能なガラス製品の需要も確実に増えていくと考える。こういった機能材料は、新たな機能を提供していく意味での研究開発も、今後競争が本格化していくものと考え。 “Connected Industries”を牽引する素材開発の取り組みを期待したい。これを進めるにあたっては、個々、個別の競争だけでなく、広く協調領域を考え、その分野を広げていくことも取り組みの一つである。新たな研究開発、市場開拓において、ガラス業界の縦横のつながりを広げて頂ければ、と考える。建築分野では、省エネルギーの高い製品や防犯・防災の観点から、まだまだ需要を掘りおこせる部分があるかと思う。経済産業省としては、ガラスに関する来年度予算で、「ネットゼロエネルギーハウスの導入支援」や「次世代省エネ建材の導入支援」を織り込んでいる。これらの制度も活用して市場開拓を進めて頂ければ、と思う。最後に、製造業の方へ期待を込めて申し上げていることが3つある。すなわち、(1) スピードあるアクション、(2) 大胆な挑戦、(3) 個性ある経営、である。ガラス産業ではこれまでも新しい分野に挑戦されてきたし、個性ある機能や製品を世に送り出してきた産業である。この6団体がこれらの役割を担ってきたと思う。このような実績ある皆様こそ、もう一度、挑戦者という意識で、新たな発展の道を切り拓いて頂きたいと思っている。経済産業省製造産業局としても、このような取り組みに対して、できる限りのサポートをしていきたい。

その後、岡本毅ガラス産業連合会副会長から「自己知覚理論」(感情が先に生まれてあるべき姿になる)が紹介され、「ガラスの未来は明るい…」と唱和するユニークな乾杯の発声により歓談となりました。



午後4時からのガラス産業連合会の新年会は瞬く間に時間が経過し、最後に、井上博之東京大学生産技術研究所教授から、中締め挨拶がありました。井上教授は、国際ガラス会議年會 ICG 2018 の組織委員長であり、ICG 2018 に関し次のように挨拶されました。



ICG 2018 年會が開催されるまで残り8ヶ月となった。この會議の主題は“Innovations in Glass and Glass Technologies :Contributions to a Sustainable Society” (持続可能な社会を支える革新的なガラスとガラス材料)であり、3つの柱で支えられている。すなわち、(1) 我々の知的生活を支える革新的ガラス材料、(2) 環境と省エネルギーのための革新的ガラス材料、(3) 放射性廃棄物のための革新的ガラス材料、であ

る。現在のガラス材料における科学と技術の広い分野を対象とした内容になると期待している。この場に参加されている方やガラスの技術者・研究者の方々には年會に参加いただき、今のガラスの科学と技術を見て、聴いて学び、さらに国内外の多くの人との情報交換の場として活用頂けると思う。口頭発表やポスター発表を

通して、日本からの情報発信の機会になる。年始から発表申し込みサイトを開設したので、多くの方に参加し発表して頂きたいと思う。

これからも「産学官」で世界に向けて総力で取り組みを進め、また、来年も盛大にガラス産業連合会の新年會が行われることを大いに祈念したいと思います。



(参考)

**国際ガラス會議年會 (ICG Annual Meeting 2018)**

開催期間 2018年9月23日～9月26日

開催場所 パシフィコ横浜

ホームページ <http://www.icg2018.yokohama.com>